

アーティスト×キュレーター オムニバス形式で3つの美術展

私たちはいま、個人の体験や感情が個人だけのものではなく、SNSなどを経て同じ時代に生きる人々へ広く共有され、新たな思考や行動へと繋がる世界に生きています。個の意志を伝える芸術表現を尊み、黙する種から芽が生え花が開いていくように、さまざまな表現が豊かになることを願って、プロジェクト「秋の種」を始めます。
2019年は「花の歌が聴こえる時代に」をサブタイトルに、福岡市内3ヶ所で美術作品の展示やトークイベントなどを開催します。アーティストとキュレーターの濃い対話から生じる現場を一緒に体験してください。

Today, we are living in a world where personal experiences and emotions are shared not only with individuals, but are also shared with people living in the same times through such as social media, leading to new thoughts and actions.
In honor of the artistic expressions that would convey the individual will, we start this project *Seeds in Autumn* wishing those various expressions will be enriched just like the buds sprout from the silent seeds lead to bloom flowers. There hold three art exhibitions and several related events such as the public talk at three different galleries in Fukuoka City in 2019.

1 konya-gallery

七擲綾乃 展 — やまぬ潜熱を食んで

NANAKARAGE Ayano Solo Exhibition - pulsating inner heat



《rainbows edge ドローイングⅨ》2018年 鉛筆、色鉛筆、アクリル・紙

アーティスト キュレーター
七擲綾乃 × 原田真紀

一木から削り出すという。傷跡のような無数の髪や穴と、湿気を帯びた滑らかな木肌の対比に息を飲んだ。生と死とが分かち難いことを、おぼろげな現象がたしかに(在る)ことを、耳をすませば小さき声がこぼれ出ていることを。七擲の木彫は、ともすれば時勢に流され見落としがちな幾通りもの事象を想起させ、私は感うばかり。果てゆく中に響く生と、この先を照らす微光を感じながら。[原田]

木肌の内部に底知れぬ熱が潜む。声高に叫ぶことなく、抗うでもなく、ただそこに在り続ける。果てゆく異形の姿は内に発する熱を静かに食み、脈打ち続けている。新作を含む連作《rainbows edge》を展覧。



七擲綾乃 NANAKARAGE Ayano [Artist]
鹿児島出身、現在広島を拠点とする彫刻家。干乾びた植物や虹などの自然現象に関心を寄せ、生と死との距離感や存在のありかを木に刻み続ける。主な展覧会に「アペルト08七擲綾乃」(2018年、金沢21世紀美術館)など。



原田真紀 HARADA Maki [Curator]
田川市美術館ほか福岡県内の美術館勤務を経て、現在鹿児島在住のインディペンデント・キュレーター。「ママとこどものアートじかん」「つくる学校」など市民目線からアートや公共性を考えるプロジェクトにも傾倒中。

3 ギャラリー港民館

Net to Net / データとして定義できない記憶

Net to Net - Memory that cannot be definite ad data

アーティスト アーティスト キュレーター キュレーター
ユン・ピルナム + キム・キョンファ × シム・ウヒョン + 宮本初音

頻繁に生地を使って作品を制作する2人は、2014年に、とある展覧会でコラボレーションをおこなった。それを機に2人はアトリエの運営を共同でスタートさせた。ユンには繊細な感覚的感性が、キムには社会的な問題を論理的に説得させるチカラがあった。互いにアーティストとして欲するものが表現と共感という形で現れ、相乗効果を生み出した。以来、ユニットでの発表を多くおこなっている。共同によってパワフルさが増したチカラを、港民館でも大いに発揮してほしい。[シム]

過去と現在、日本と韓国、互いに複雑に絡み合う因縁とその関係に関する考えを解きほぐす作品を、インスタレーションとして発表する。



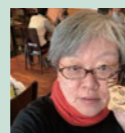
2016年 共同制作作品



(左) ユン・ピルナム / 尹 弼南 YUN Pil Nam [Artist]
韓国・釜山出身、釜山を拠点に活動。多岐にわたる人間社会の現実と理想の差や人間の根本的な存在意識に対する苦慮を、繊維を使ったインスタレーション作品として表現している。主な展覧会に「釜山ビエンナーレ」(2016年、F1963 韓国・釜山)など。



シム・ウヒョン / 沈 佑炫 SIM Woo Hyeon [Curator]
韓国・蔚山出身、2005年より福岡在住。大学と大学院は写真学を専攻し、アジアフォトグラフィアーズギャラリー設立に参加。現在は、九州産業大学造形短期大学部講師として勤務。「ギャラリー港民館」主宰。



(右) キム・キョンファ / 金 京和 KIM Kyung Hwa [Artist]
韓国・晋州出身、釜山を拠点に活動。時代的な社会背景と人間との関係性、排他的都市性、共存の価値観などに関心をもち作品に取り入れる。主な展覧会に「光州ビエンナーレ」(2018年、ACC 韓国・光州)など。

宮本 初音 MIYAMOTO Hatsune [Curator]
ART BASE 88代表。1980年代より、福岡を拠点に街なかのアートプロジェクトやアートマップ制作、国内外アーティスト交流事業などを企画・運営する。1962年生まれ、福岡市在住。

2 EUREKA エウレカ

I'm here / 私はここにいる

I'm here

アーティスト キュレーター
首藤マヤ × 川浪千鶴

40年近く福岡を拠点に活動し、どんなタフな現場でも独自のインスタレーション作品を実現させてきた首藤マヤその圧倒的な存在感。《私》と《ここ》の手応えは大きいかと思える。しかし、私は今どこにいるのか? という自問はつねに共にあるのだと打ち明ける。私は、福岡の街とアーティストたちに育てられて学芸員になり今がある。そうした《私》たちの「協働」。さてどんな思いがけない歌と一緒に歌うことができるだろうか? [川浪]



首藤 マヤ SHUDO Maya [Artist]
1970年代から「Mixed Messages」などのグループ展と個展で活動する、福岡における草分け的な女性の現代美術家。布や植物、樹脂を使ったオブジェとそれらを組み合わせたインスタレーションは迫力満点。



川浪 千鶴 KAWANAMI Chizuru [Curator]
1981年より福岡県立美術館と高知県立美術館で学芸員を務めたのち、2018年から福岡を拠点とするインディペンデント・キュレーターに。地域とアートの関係を見つめ、地域と美術館の可能性を探りながら、あちこちに出発中。



「首藤マヤ展 -運び去る時間-」2019年 アートスペース 狭 (福岡市)より

アーティスト キュレーター
天野百恵 × 関岡絵梨花

美術表現、古民家改修、二児の子育てなど、どれをとっても創造的。大胆かつ軽やかに自身の筋力で生き抜く藝術生活人! 天野が築く拠点に人々が集い、磁場が派生する。一人では決して起きないクリエイティブな場と化学反応が生まれる。生活と地続きにある表現を模索する天野の姿は常に自然体で、誰もがクリエイティブになれる? そんな疑問を抱かせてくれる。今回はちょっとだけ糸島の拠点を離れてピクニック。「くるくるハイツ」や近隣でのイベントも計画中! [関岡]



天野の活動拠点「くるくるハイツ」外観とイベント風景 2017年



天野 百恵 AMANO Moe [Artist]
福岡県出身。糸島の古民家「くるくるハイツ」を拠点に子どもと暮らしながら、人々を巻き込んだ場づくりなどクリエイティブな活動を展開。主な展覧会に「藝術生活宣言—だって楽しいだもん!」(2018年、九州芸文館)ほか。TED x Fukuoka 2018 登壇。



関岡 絵梨花 SEKIOKA Erika [Curator]
インディペンデント・キュレーター。大学美術館勤務を経て、現在、九州芸文館で福岡県主催の美術展ほか、アートプロジェクト、レジデンスなどを企画。主な展覧会に「藝術生活宣言—だって楽しいだもん!」(2018年)など。

アーティスト キュレーター
池田ひとみ × 藤本真帆

もくもくと、ひたすらに、糸を「編む」ことを通じて池田は作品を生み出す。美術と呼ばれるものの境で、池田が紡ぎ出す象徴と光景には、溢れる手の欲望と形への好奇心が滲みだし、私の目を引きつけた。境界線上の曖昧さと戸惑い、そのなかに息づく情熱と強かさ。「I'm here」と声を発するとき感じる《ここ》の不確かさを巡って、池田と私が繰り返した問いかけと応答を「EUREKA(見つけた!）」という場で結実させたい。[藤本]



池田 ひとみ IKEDA Hitomi [Artist]
糸を編んだインスタレーション作品を、別府(大分)や浜松(静岡)のレジデンスなど各地で制作。現在は福岡を拠点とする。毛糸や刺繍糸という自らに身近な素材による繊細な編み目の連なりを展開させ「いつもとは違う眺め」を生み出す。



藤本 真帆 FUJIMOTO Maho [Curator]
2012年より福岡県立美術館学芸員。福岡の現代美術、ドイツ近代美術を中心に調査や展覧会企画に取り組む。福岡県の新美術館構想にも関わる。主な展覧会に「ARS/NATURA -「風景」の向こう側-」展(2017年)など。



「大きな編み目と小さな編み目」2019年 WALD ART STUDIO (福岡市)より